

Teacher's Manual : LANDMARK English Communication I

Can-Do リスト解説書

Can-Do 尺度に基づいた学習と評価のアプローチおよび授業展開例

付属資料

本付属資料は「Can-Do リスト解説書」を補足すべく開発が行われた。サンプルとしてあげた下記付属資料は、福岡県立香住丘高等学校との共同研究のもとで、実際に解説書を利用しながら、年間を通じて行ってきた授業実践をもとに編集を行ったものである。

- ① 「観点別シラバス」 サンプル (4 ページ)
- ② 「自己評価チェックリスト」 サンプル (2 ページ)
- ③ 「発問シナリオ」 (授業展開) サンプル (16 ページ)

2013 年 3 月に文部科学省初等中等教育局より、『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』が公表され、各中学校・高等学校では、学年ごと及び卒業時の学習到達目標を「英語を使って何ができるか」といった Can-Do リストの形で設定し、リストの内容を具体的に年間指導計画と単元計画に反映させることが期待されるようになった。その上で、到達目標の達成状況を把握するための評価計画を立て、指導と評価を一体化させることで、「教科書を教える」のではなく、「教科書で何を教える」のか、さらには、最終的なパフォーマンスから遡り、どのようにその発達過程を評価し、活動を設計するかを考えることが求められていると言えるだろう。

(「手引き」 URL : http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1332306.htm)

Can-Do リストに基づいた学習到達目標の評価においては、観点別学習状況評価のうち、「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」の観点と関連させて位置付けることが想定されている。単元ごとの評価規準を年間を通じてどのような能力を身につけて行くのかの目標と対応させ、スパイラルに評価を行っていくことが考えられる。本付属資料の「観点別シラバス」はそのような観点別学習目標の設定と評価に、いかに Can-Do リストの到達目標を反映させるかの例を示している。より包括的には、「手引き」において、学習到達目標から年間指導計画、また単元計画への反映のさせ方の具体的な流れが記載されているので、本付属資料とあわせて参照してほしい。

「手引き」にはまたこうした Can-Do リストの教員と生徒間での目標の共有による自律的学習者としての態度の育成が趣旨として掲げられている。本付属資料においては、教員向けの「観点別シラバス」と並行して、生徒向けに記述をあらためた「自己評価チェック

リスト」の例についても扱っている。さらには、新学習指導要領下において、「英語で英語の授業を教える」にあたって、解説書で取り上げた「本文の各パートの Q&A に基づいた Can-Do 尺度例」に基づいた授業展開のための「発問シナリオ」例を付属資料に含めた。以下にそれぞれの付属資料の取り扱い留意事項及び活用方法について記す。

①「観点別シラバス」サンプル

……「理解」と「表現」の能力の目標・評価の観点について、Can-Do リストの形で簡潔にシラバス上に記述している。それぞれの観点ごとに扱っているレッスン番号を付記しているが、ひとつひとつの目標をそれぞれの単元で毎回すべて扱うのではなく、本文の内容の深め方や活動の焦点に合わせながら、年間を通じて繰り返し扱うように設計している。シラバスを中間期末考査ごとに区切ることでサイクルを設け、観点によっては年間を通じて次第に難易度をあげていくものや通年で伸ばしていくものなど工夫をしている。例にあげたのは SSH (Super Science High School) クラスでの実践を下敷きにしたものであり、科学英語を扱ったレッスンを選択し、配列を並び替え、扱う比重も、例えば Lesson 4 は重くし、活動を深めるなど、長期的な見通しの下での授業時数の柔軟な調整を行っている。

②「自己評価チェックリスト」サンプル

……自己評価における内省にあたり、具体的に活動を想起しやいように、教材名等を明記して文脈化を図ると同時に、観点別での評価基準を意識した質的及び量的な評価指標を記述に含めている。「何ができるか」だけでなく、「何がどうできるか」を記述し、解説書で扱った尺度（リスト）の段階化を踏まえたものとしている。技能統合のクロスレファレンスだけでなく、前後期のチェックリストで共通項目と発展項目も分かるようにすることで、能力発達へのメタ認知を育て、できる感を感じさせる工夫をしている。また、能力（できるか）だけでなく、ニーズ（やりたいか）についても、能力と関連させて尋ねることで、授業への主体的関与を促進する自己の目標設定や自律的学習への動機づけも図っている。

③「発問シナリオ」（授業展開）サンプル

……本文理解の深さを問う発問活動に関して、「前提」「命題」「展開」といった情報理解を進めて行く上で、理解への足場作りをどう行い、表面的な理解に留まらず、個人的理解に落とし込んでいくために、それぞれの質問をいかに関連づけ、文脈化していくかを、具体的な授業展開のシナリオに書き起こして示している。実際の授業においても、こうしたシナリオを毎回の授業に先だって開発し、教員間で共有することで、Can-Do リストが形骸化することなく、授業に組み込まれる一助となる。サンプルでは Lesson 4 を取り上げたが、インプットからアウトプットへとつなげるために、内容について学び、考えさせるような、CLIL（内容言語統合型学習）的なアプローチを採用している。

「発問シナリオ」については、他のレッスンについてもウェブ上に順次アップしていく予定である。解説書とあわせて参照し、教員の興味を活かした深い授業に仕立ててほしい。

【編集】長沼君主（東海大学准教授）

永末温子（福岡県立香住丘高等学校教諭）